



原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人
鎮守の森のプロジェクト事務局)

第九回 ラザフォード・オールコック『大君の都』(中)

前回ご紹介した通り、オールコックは日本に対して非常に厳しい目を持っていました。それにもかかわらず、手放しで評価せざるを得ない対象がありました。今回はその中から、彼が見た日本人の姿をご紹介します。

まずは彼が日本人のあらゆる階層の人々と接する中で感じた立居振舞について。

「多くの人が、明らかに最上の服装をして外にでており、人に会うたびにまじめにいていねいなあいさつを交わしていた。かれらは、両手をひざのところまでおろし、身をかがめ、息を押し殺したような感じで、口上をのべる。その身のかげめ方の深さと敬意を表する程度とが密接な関係に

あることは、一見してわかる。それは、あたかもこのような出会いのよろこびや満足が、口に出していうにいわれぬひじょうに深遠な何物かであることを示しているかのようだ」

他にも「愛想がよくて理的で、礼儀正しく上品な国民だ」「日本人は、世界中のどの紳士にも劣らぬほど完全な紳士だ」などと、ともかく驚きを隠し切れないようです。

また、人々の生活については、「気楽な生活を送り、欲しい物もなければ、余分なものもない」「かれらの生活の習慣は、明らかに、きわめて単純だ。畳を敷いただけの、大きすぎることもない、概して清潔な

部屋、一種の壁の凹み(床の間)にいれられている若干の棚ないし漆塗りの低い板切れ、若干の漆塗りか磁器製の茶わんと皿、および脚付きの盆」と、富裕な人々であり、その日暮らしの生活をしている小売り商人や農民であれ、家の中を構成する設備は、ごくごく簡素であり、清潔を保つ手段ともなっていると言っています。

一方、外交官としての視点からか、イギリスとも比較しながら、日本の将来を担う子供たちの生活や特徴についても鋭く観察しています。

「イギリスでは近代教育のために子供から奪われつつあるひとつの美点を、日本の子供たちはもっている。わたしはいい。すなわち日本の子供たちは、自然の子であり、かれらの年齢にふさわしい娯楽を十分に楽しみ、大人ぶることがない。かれらはひょうきんな猿を背負った旅芸人を追っかけてゆくし、そのような楽しみからえられるような幸福より重厚な幸福は望まない」

「いたるところで、半身または全身はだかの子供の群れが、つまらぬことでわいわい騒いでいるのに出くわす。それに、ほとんどの女は、すくなくともひとりの子供を胸に、そして往々にしてもひとりの子供を背中につれていている。この人種が多産系で

あることは確実であって、まさしくここは子供の楽園だ」

子供をかわいがる精神的な余裕があったのは、簡素で清潔な生活の追求から余分なことを省いたことにも一因しているのかもしれない。そして、たくさんの愛情を受けて、立居振舞も立派な大人たちに育てられた子供たちは、各々の立場や仕事を持つ大人になっっていく、良い連鎖が生まれ、とても幸せな社会が育まれていたことが窺えます。まさに、親の背中を見て子は育つものなのですね。

他方、そうした社会から生まれる人々の人格と技術レベルの高さについて、特に彼が驚愕したものがあります。

「日本にも、わが国のいかに優秀な技能を有する職人でもまねることができないと思われるような絹織り物や縮緬ちぢみがある。またわれわれは、かれらの美しいほうろう細工の花瓶に匹敵するものをつくることのできないし、われわれのすべての発見とその応用にもかかわらず、かれらのように街頭で小さな木炭の火鉢と火吹き竹で鉄瓶の穴を修理するようなこともできない」

「日本人は、おそらく世界中でもっとも器用な大工であり、指物師であり、桶屋である。かれらの桶・風呂・籠はすべて完全な細工の見本である」



オールコック

「すべての職人的技術においては、日本人は問題なしにひじょうな優秀さに達している。磁器・青銅製品・絹織り物・漆器・冶金一般や意匠と仕上げの点で精巧な技術をみせている製品にかけては、ヨーロッパの最高の製品に匹敵するのみならず、それぞれの分野においてわれわれが模倣したり、肩を並べることができないような品物を製造することができる、と念のためいもなしにいえる」

まさにそれは日本人の仕事に妥協を許さない誇りから生まれる職人技でした。彼が感じたものはそれだけではありません。日本人は外国製品についてもよく観察し自力での作成に研究熱心だと言っています。

こうした職人技と勤労観は、現代にも受け継がれ、様々な分野において世界で活躍する製品を生み出す原動力になっています。

さらに、彼は日本の寺院の佇まいの美しさや僧侶の礼儀正しく丁寧な対応、あるい

は仏教の教えや儀式についても語っています。なかでも、「日本の寺院についてのべるに当たっては、その墓地について語ることを省略すべきではなからう。日本の墓地は、かれらの宗教のなかでもっとも注目にあたしいし、かつまた心地よいものであって、死者のいこいの場所にたいして当然われわれがいだく神聖な感じともっとも調和している」と言っており、日本人の死者に対する礼節がそこから読み取れます。

また、それは人に限ったことではありません。旅先の熱海でオールコックの愛犬が亡くなった時のこと。地元の人々は、愛犬を手厚く墓に葬ってくれたというのです。

「私の別当のかしらは、犬が死んだことを聞くときすぐにかけて、かご製の経かたびらに犬をつつみ、とむらいをした。私は宿所の経営者に木陰の美しい庭に犬を埋葬する許可をもとめた。するとかれは、すぐにもみずからやってきて、墓を掘る手伝いをしてくれた。あらゆる階級の一人の助手たちが、あたかもかれらじしんの同族の者が死んだかのように、悲しそうな顔付きでまわりに集まってきた」

それに対しオールコックは、「日本人は、支配者によって誤らされ、敵意をもつようにそのかされなるときには、まことに親切な国民である」と感激しています。日本人の生きとし生けるものへの慈悲深さや感謝の心を感じたのかもしれない。